



柳瀬のつり橋から宮原へ



ゲンコウ岩



宮原観音堂

柳瀬の吊橋の西岸に「から谷」と呼ばれる小川がある。現在は豊かな水量があり、三篠川に勢い良く流れ込んでいる。以前は、水が少なくこの名称がついたと伝えられている。から谷から宮原の観音堂までは、川端の西側の崖道を行く。道幅は一メートル程度で、現在は歩く人もなく木々に覆われている。この付近の山は川端までせり出していて、川舟の時代、木を伐れば、すぐ前の川から荷を積み出すことができたため、木の運び賃が安くすみ、評判がよかった。観音堂は芸備線の陸橋の手前、三〇メートル程度の岩盤上に建っている。もとは一寸八分の金むくの観音像が安置されていたが、盗難に会い、明治になって六十六部衆が全国行脚の途中、背負っていた像をここに安置したと伝えられている。観音像が淵に向かって安置されているのは、淵の水難者を救うためともいわれている。観音堂について「国郡志御用ニ付下調査出帳」には「宮原と申より狩留家村江之間少々坂有之七八間少急なる方ニ御座候。此所石滑らかにして常に水気絶ず雨後などにわけてよろしからぬ道御座候。此上に古き観音堂有之候」とある。また、白木町在住の竹内寿氏所蔵の三田村絵図（国郡志に付して提出した図の写し、永井操六氏原蔵）には「名称 観音堂」の記載と図がある。

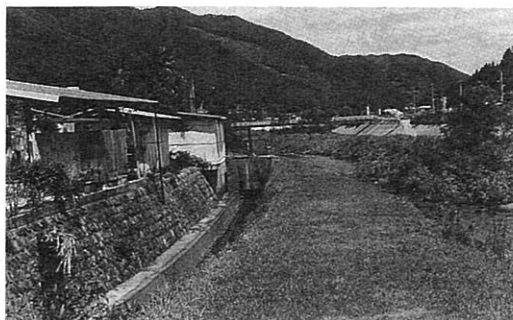
芸備線陸橋の上流五〇メートルのところの橋が三田橋である。往還は橋を横切り、川の西端を行く。川が急なカーブになっている辺りの川中に大きな石が多くある。急カーブ付近に、昔大岩があり、ゲンコウ岩といった。かつてはこの辺りで鮎がたくさん釣れたとのことである。「三田村絵図」には岩の図と「ゲンコウ岩」の記載がある。また「国郡志御用ニ付下調査出帳」には「宮原郷の前川ゲンコウといふ瀬下に有り何故に斯唱来りしにや依り所もなく申伝もなし。此瀬下に有る故にゲンコウ岩と云。高サ水際より八尺ノ広サ三間西方水際ノ広四五間四方。能鮎の附く所也。此岩根水際に漁父の足たまり有りて四五人宛も網を構え測より



福永八幡神社



西福寺から山麓を通る道



川土手の道、前方に見えるのが小椿橋

登り瀬より落くる鮎をまちて網うち争う風情実興ある所に候」とある。往還道は途中の民家(三上氏宅)前までは道があるが、そこから上流は河川改修で道がなくなっている。その延長上を現在の県道まで行った辺りのことを、福永八幡神社の参道横に住む黒河久氏(くろこうひさし)七六歳)は、次のように証言している。

宮原観音の下から、福永八幡さんの下までの川土手は、河川改修で様変わりした。古往還は、今の土手沿いに三田橋の上手、砂崎氏宅、三上氏宅の前を通り、八幡さんの下で旧県道と合流した。三上氏宅から、八幡さん下までの道は今はなくなっているが、私の子供の頃は、川端から県道に出るまでの県道寄りに私宅の梅の木畑の小さいのがあった。その外側を古往還が通り、近くに「平(ひら)の洗場」というのがあり、近くの人が物を洗いに来ていて、石段で川に降りられるようになっていた。

現在の県道を斜めに渡り、旧往還道に入る。山側の神社が福永八幡神社である。芸備線の手前に大正年間に奉納した石灯籠がある。福永八幡神社前の川の中に、かつては「柳瀬の井堰」があったが、現在はやや上流に移築されている。絵図には「柳瀬用水溝」の記載と共に図が描かれている。絵図に、橋の図と「小椿橋」の記載がある。図の橋は現在の橋の少し上流にあったとのことである。

宮原辺りから県道に合流した旧往還道は小椿橋の西詰めを通り、福永大谷(福永川)を渡る。この谷が宮原郷と福永郷の境である。川の横から芸備線の踏切を越えると、浄土真宗西福寺の門前が出る。由来は古く、「国郡志御用ニ付下調査出帳」に「一、真宗 経尾山 西福寺 当村福永郷之内西ヶ原と申候ニ有之候 開基浄覚俗姓周防国大内家之一族黒川新左衛門と申人天文年中之末当所ニ蟄居遁世して当寺を開基す。(以下略)」とある。門は薬医門で安定感がある。裏山の墓所に故榎崎圭三氏の墓がある。明治に三田を通る県道を開発した人物としても有名であるが、



蛇の鼻



地獄谷、右下に谷川がある

炭焼き・シイタケ栽培などを全国に広げた業績もある。周囲には「小田屋（おたや）」など先祖の墓がある。古いものは「明和」の年号を持つものもある。

西福寺から山の麓を緩やかなカーブになって行く。田と家の石垣の間に約一メートルの往還道が続く。白木山の登山道まで昔のままの道がよく残っている。田の中に、芸備線白木山口の駅が見える。白木山登山道を横切る十字路からは道幅も広くなり、アスファルト舗装道路となる。林地区に入る前の道路下に福永荒神社が見える。絵図にある荒神社である。境内には、大きな木に囲まれるように檜崎圭三氏の顕頭碑が立つ。以後は、舗装道を行き、林郷に入る。

林郷の平野部を過ぎると木々に囲まれた谷川がある。これが地獄谷である。栗原・林両地区とも虫送りの行事の際には、ここまできて送ったといわれる。谷川には現在は橋があるが、かつては飛び石をおいて渡ったと伝えている。「国郡志御用ニ付下調査出帳」には「其上（中山峠の石道がある場所の上）は平道にして所々大雨洪水之節、山水をはけ流す谷筋工飛石を居起有之、常ハ水一滴も無之候。林と申江至り候所只讒之登り下りにて坂と申すほどにも無御座候」とある。

地獄谷が三篠川に流れ込む辺りの水面には岩が露出している。これを蛇鼻淵という。絵図にも描かれており、「国郡志御用ニ付下調査出帳」にも「一、蛇の鼻 福永という所の瀬頭淵の中江差出たる岩の形蛇の頭に能似たる故に斯名を呼ぶ。此岩岩根少の淵なれども深き事、竹竿式三本も継て差入ここに船をとどめていん食す。」とある。現在は、河川改修で岩が砕かれ小さくなっているが、その上の淵はかつては大人の船遊びや句会、子供の水遊びの場になっていたという。

地獄谷から栗原に至る峠を中山峠という。途中までは土道であるが、途中からは石畳の道になる。この近辺は石が豊富で、県道の改修では逆に「難儀した」とも伝えている。石質はこの付近を特徴づける「高田流



中山峠



蛇鼻淵



中山峠から栗原への出口

紋岩」である。現在でも整然と残っている姿は、先祖の努力が偲ばれて感慨深い。石を敷いた理由は旅人の便宜のためばかりでなく、山で木を切り、下に降ろす時に引木を引いて降ろすが、その際、滑り良いために石にしたとのことである。ここに石を敷いた歴史は古く、「国郡志御用ニ付下調書出帳」には「栗原より林と申間に中山と申峠有之、其間七間、栗原の方より登り三四拾間、格別急にも無之候得共石道に御座候」とある。中山峠の栗原寄りの道を教西道といった。この道の途中では教西狐という利口な狐がよく出没し、人間を騙したという話が伝えられている。栗原郷では平野部の中を行く道と、山際を行く道の二説がある。絵図は平野部の栗原八幡宮の下を通る道を大きく描いており、当時はこちらが往還道と考えられる。

栗原踏み切りを渡り、栗原郷の家並みを行き、中三田の駅前からは現在の県道を行く。対岸の小学校は三田小学校で、隣接の集会所に後述の久保の米問屋の棟石が保存されている。県道を五〇メートル程度行き、左側にカーブする手前の左側に小さな小道がある。これを登り芸備線を横切る。さらに家の間を抜けて里道に出る。そこから一〇メートル程度を行くと大きな曲がり道になる。地元ではここを大曲(おおまがり)と呼んでいる。現在の道は大きく曲がって下に行くが、旧往還道は真っすぐに行く。現在は山道であるが、付近の山々のシイタケ栽培のために意外と整備されている。

畑から海戸へ行く峠を妻の峠(さいのたお)という。途中まではシイタケ栽培のために整備されているが、尾根の部分からは切れてしまい現在は確認できない。これは、鉄道を敷設する時に山を削ったためである。「国郡志御用ニ付下調書出帳」には「海戸より栗原と申間ニ妻之峠と申少之峠有之其間六町、栗原より海戸之方江登り候所拾二間之坂少し急に御座候得共平道同様の事に候」とある。下の踏み切りの名称は「三の峠」となっている。妻(塞)の峠は、塞の神を祀る社があったが、村の中央の



イシボトケ



栗原の家並の中を行く



サイノタオの道、右下に鉄道が通り道が切れている



久保の米問屋の棟石

少々出張った所で、村全体を見通せる所と伝えている。妻の峠を下った木々の中の覆屋に二個の大きな石が安置されている。地元では現在「イシボトケ」と呼んでいるが、念仏石の名もある。「国郡志御用ニ付下調査出帳」には「此峠（妻の峠）之間、往還道上に念仏石と申凡式尺四面程ニ立テ五尺余りの石有之。其脇に立横とも此石半分位の石並ひ立。只雨露を防ぐ斗に藁葦之小家建覆ひ有之候。古昔、円光大師此所通り給ふ時、念仏と此石と何れ重き哉と里人に量くらべさせられしに名号大二重もく其石刎て道下え落有之候所、此所ニ念仏の声をあやしみ尋見候所、此石より声を発し候故、道上エ引揚げ立置候由。小き分の石ハ形ち似寄候故、後年脇江たてならべ候ものにも可有之候哉。尤も右の次第は只ほのかに里人咄伝候迄之儀にて何を社証と仕候儀ハ無御座候」とある。妻ノ峠踏み切りから弥谷踏み切りの間は、鉄道線路と重複し、道を見ることはできない。

海戸では家並みの間を行く。家並みを過ぎ、芸備線弥谷踏み切りを渡る。この上の尾根上には三田新城跡がある。「国郡志御用ニ付下調査出帳」には「新城 瀬戸郷より海戸郷江移る往還ノ上ニ有之。少輔七郎ノ嫡子三田能登守元吉 元吉の二男五郎右衛門元親二代の居城跡也。五郎右衛門尉輝元卿に順ひ長州江移転後廃城す」とある。付近には三田五郎右衛門の屋敷跡も残されている。

海戸から柳原へは二説がある。海戸の家並みを過ぎてから山際を行く道と平地部を行く道である。家の点在の様子からは山際を行くのが自然であるが、絵図でも海戸から瀬戸郷・柳原郷へは平野部から川岸を行く道が太く描かれ往還を示している。山際の道も描かれているが細く、当初は山際の道であったが舟運の開発で川岸の道に移ったのであろう。

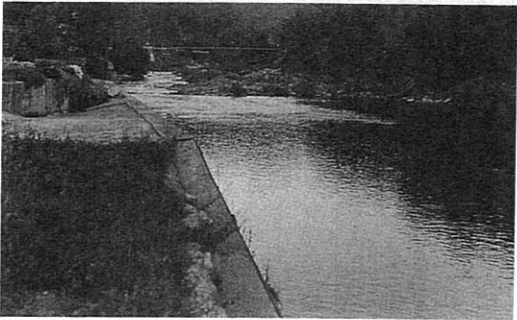
旧往還道は、弥谷踏み切りからは、今の県道に出て、弥谷川を渡ったところから、川土手沿いに北に伸びており、途中から馬返しのところを通る水路の川端寄りを通っていた。川本氏宅の上手からは右に折れ、少



久保湊(上流から)石垣が残る



馬返し、周囲は田



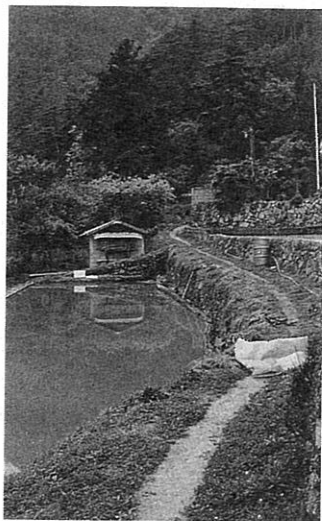
久保湊(下流から)



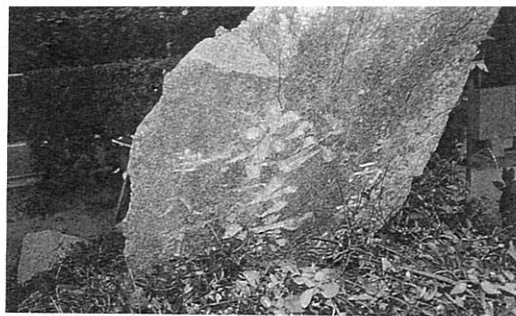
石垣下に小道として残る

し下りて再び川土手に出た。昔は川幅が狭く、今の川土手の両端に田が何反もあり、その田の川寄り道を道が通っていた。したがって、竹内氏宅前の道が土手と合流した辺りから上手の馬返しに出た直角に曲がった辺りまでは、現在の川の中に道があったことになる。この辺りは、昭和四十年の大水害で、川岸が決壊した。四、五年後にブロックで護岸整備され、昔の古往還の姿は大きく変わった。馬返しの名の由来は「年貢米等の運搬の馬が、ここから引き返して、奥部へ帰った」ところと伝えられている。ただし、三田川舟運の就航は四、五段階で開発が進んでおり、ここまで馬で荷を運んだのは当柳原馬返しのある集落名まで開通した一時期だけであり、久保浜(入野)が開かれた時以降は不用となった。以後、田畑に開墾され、当時の面影は全く無い。

馬返しの内りからは、田の畔となっている道が新三田橋まで直線で続く。新三田橋から北も旧県道ではなく、三篠川に沿った小道が用水横に続く。八幡橋(はちまんばし)を過ぎ、柳原八幡神社を過ぎて約五〇メートルほど行くと、県道に合流する地点から五〇メートル位で右折し、民家の塀に沿って左折する。さらに畑と屋敷地の間を進んだ右手が久保湊跡である。近辺の荷を舟に積み替えた場所であり、米問屋があった。現在は畑地になっているが、川に面して倉の石垣が広く残っており、当時の規模を偲ばせる。「国郡志御用ニ付下調査出帳」には「一、湊 当村久保と申所ニ御座候 当湊ハ当郡前高田筋と申、上甲立村、下甲立村、高田原村、上小原村、戸島村、坂村、長田村、保垣村、有留村、井原村、古屋村、市川村、小越村、秋山村、当村此拾六ヶ村御年貢米、長田湊より積下し、但し長田村ヨリ川下之村々ハ井原村、小越村、秋山村より直三田取立之分ハ久保湊より積下し下三田取立ノ分ハ直二下三田より積下し申候」とある。また「一、川船株舟三拾艘」とあり、運上金を納めて株を持つ舟が活発に上り下りした様子が分かる。



轟から十郎右衛門川への道



相撲取り松ヶ濱の墓



十郎右衛門川

屋敷地と畑の間の道を行くと新県道と斜めに交叉する。草叢の石垣に注意して芸備線の方へ進み、田の畔に沿ってまた新県道に戻る。その右側に「相撲取りの墓」がある。正面に「松ヶ濱」の名と天保の年号が確認できる。

新県道に沿って行くと右側に測が続き、曲がり角の部分は岩が多く露出し、飛び散る水しぶきとともに奇観を呈している。「国郡志御用二付下調書出帳」には「一、名勝の部(略) 一、轟 川中に有り 右方の山。 敵そびえ川中にはたかる。其所江石築置往還路を調、又溝を附け貢田を養う用水を通ず川中の岩石叢々として五つ六つの凹みなる所より岩下江落込ム水音昼夜とどろき止さる故に轟の名を得しならん。左方三日市郷に添て水勵しき所江松が枝、柴木歯朶などの類ひ伐敷ならべ船通ふ水筋を物して登り下る船の争ひいとおかしく、風景の地にてころある旅客脚をと、めざるはなし。(略)」とある。

ここから川岸の道を行くが、轟のカーブの手前から往還は上にあがった。ここは鉄道によって登り道は消滅しているが、逆から回っていくとかなり高い所を行く道が途中まで残っている。木の下を通り、畑地の中を通って直線を行く。竹藪の下辺を小さな水路に沿って進み、消防団分駐所の裏を通る。竹藪を過ぎると畑に入り、右に曲がりながら二棟の倉の間を通って直角に旧道に出る。ここから旧道を行く。右の道路端に「大坪彦兵衛」の碑が立つ。「年貢減免を実現した義農」とのことである。さらに進み、畑道を右に入ると十郎右衛門川にでる。ここが旧三田村と秋山村の境である。

旧秋山村では、吉永から須沢への道は谷川家横の蔵を過ぎて、小川に沿って一〇メートルほど山手に上り、田の畔になっている石垣の間を右に折れる。幅約一メートル弱の小道が右手の田の中を、緩やかなカーブを描いて茶堂家のある小山下に向かって続いている。茶堂家前、桜井家裏を通り、以後は山際に沿って道が続く。途中、家・墓所によって不明



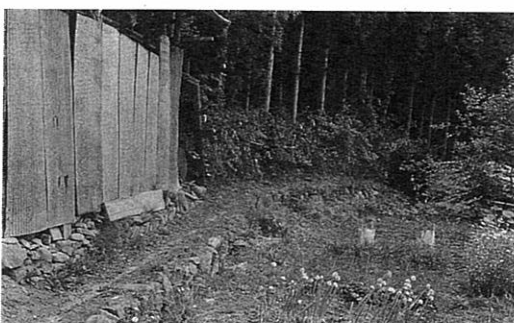
経王塚



吉永から須沢への道、ゆるやかにカーブを描く



住吉神社



竹藪や杉林の中を行く

の部分もあるが、これ以後は以前の道がよく残っており、一本道である。竹藪・杉林に入る手前に左側山手に向かって山道があり、その側に径一メートル程度の湧き水がある。

杉林・竹藪の間の道は最近でも畑仕事・山仕事に使用されているようで、保存状態は良い。ただ、筈を狙って猪が、道を含めあちこちを掘り起こしていた。道も通る人が少なく、荒れていく危険性がある。杉林を抜ける辺りに石垣を築いた上に数基の墓がある。左側には岩盤が露出しており、当初はその上に設置されたものであろう。古いものは「天保七年」「弘化三年」の記年銘があり、横に「文久」の経王塚がある。竹藪を抜けると左手山側に整備された石垣が続く。その上は藪になっているがかなり広い面積があり、以前は街道に面した屋敷があったものであろう。

住吉神社までは畔道になっている。下にアスファルト道ができ、生活道として使用されているため、旧街道は畑仕事で使われている程度である。途中は、屋敷地と道の境が不明確なところもある。この地に住吉神社がある理由は、「この近くでは三篠川に就航する三田船が多く住吉信仰があった」ためと伝えられている。境内には「文久三年」の「法華経巻部一字一石」の碑がある。

河津川を渡るのは、現在は河戸橋であるが、以前はその約一〇メートル川下を渡っていたようである。住吉神社から川までのアスファルト道の山手の山中に小道らしきものがあり、これが街道であったと考えられる。右手の墓所の横を田の方へ下りる道があり、この延長上の場所で川を渡ったのであろう。現在は橋は無いが、瀬があり、この辺りと考えられる。

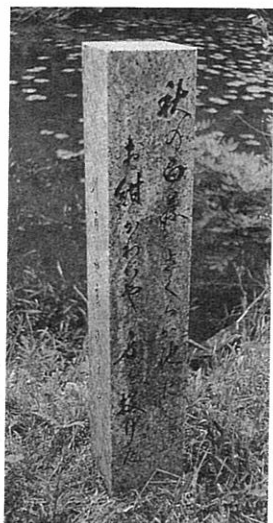
川を渡るとアスファルト道から山手に入る道があり、これが旧往還道である。その三叉路山手側に三〇センチばかりの道標が立つ。正面は「左ハホリコシ」、横に「昭和八年」とあり、秋山から堀越へ抜ける畔道への入り口であったことが分かる。なお、現在はこの辺りは同じ地域のように



住吉神社下から河津川を望む(左下が河戸橋)



山中の道



さくらが池の碑



堀越への道標

に思えるが、山へ入る道より下側の家は旧秋山村に属し、すぐ上の家は旧市川村に属しているとのことであり、この道が旧村を分ける境になっていたのがわかる。現在は山仕事などで使用される程度であるが、桜峠への道が木々の間を続く。左右は赤松や竹藪が続き、幅約二メートルほどの道は旧道の様子を良く残している。付近の石を道に並べて階段状にしたところもあり、かなり整備された道であったと思われる。山中の道は谷筋より少し上を通過して等高線上に曲がりながら進む。山下に池や小さな田がある。坂道は所々に石段を付け、右手山側には崩れないように石垣が築かれている場所がある。谷側には溝石がある場所もある。

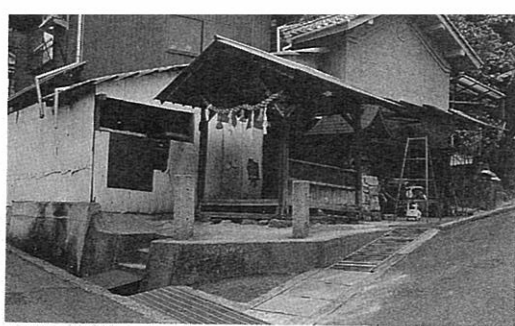
山中の道を抜けると県道三七号線にでる。この辺りが桜峠である。現在の三七号線の峠付近に茶屋があったと伝えられている。山中の道から県道三七号線に出て、市川方面へ一〇メートルほど坂道を下ると、右に小さな池がある。この側に高さ約一メートルの石碑があり、「秋の白藤 さくらが池に お紺かわいや 身を投げた」と刻まれている。かつて付近の村の若者とお紺という娘が駆け落ちし、この池に身を投げたという話をもとに歌われたものである。

峠から下った所を、右に折れる県道三七号線から分かれ、真つすぐに進むと、古い家並みが続く。堀越の市街地で、かつては五月には近在から集められた芝草市が開かれ賑わったとのことである。幅三メートル程度の道であるが、峠下の三叉路辺りまで両端に屋台が並んだとのことである。家並みには造醬油屋、旅館など様々な店が並び、旧市場町の面影を残している。家並みに入り、一〇メートルほど行くと左に胡神社がある。御神体は木造の大黒さまである。市の神として信仰を集めている。市川堀越の市街地は丘陵に挟まれた平地に発展している。早くから人が住み着いたよう、谷筋の丘陵上には多くの古墳がある。

家並みを半ば過ぎた所で、右に折れる道がある。ここが志和堀への分岐点である。三叉路の角に高さ約二メートルの道標がある。正面には「志



塔の岡あたり



堀越の胡神社



順教寺



志和街道の道標

和街道 距八本松参里二七：距 志和堀壹里参拾丁式拾：」右側面「大正元年十二月竣成石田 久・」左側面「距 廣島市 五里三十五町 三次町 八里三〇町」裏面「工事管理者 秋越村長 高雄豊・」とある。下端はアスファルト舗装時に埋められており判読できない。市川堀越の市街地が終わる所の左側に荒神社がある。

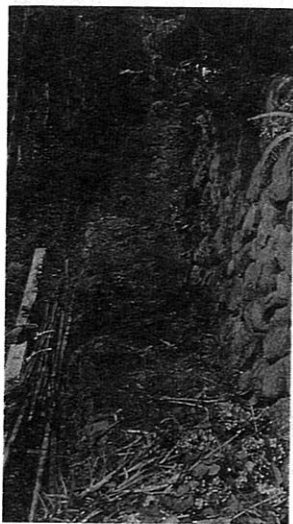
志和口駅の裏手で旧往還道は左に曲がる。この辺りが塔の岡である。かつては龜山神社の神護寺である大乘寺の塔があったところといわれている。大乘寺は現在の浄土真宗順教寺の前身でもある。天文七年（一五三八）の棟札には井上元盛が建立し大乘寺住持が遷宮供養したことを記している。現在の建物は寛政五年に牛頭天王、大神宮、河内神、金比羅の諸神を合祀し再建された時のものといわれている。

日浦川を渡ると市川集会所と消防署が並ぶ。ここはかつての学校跡である。天応の市街地を過ぎるところで水路に従って左に曲がる。この川上に旧役場跡がある。

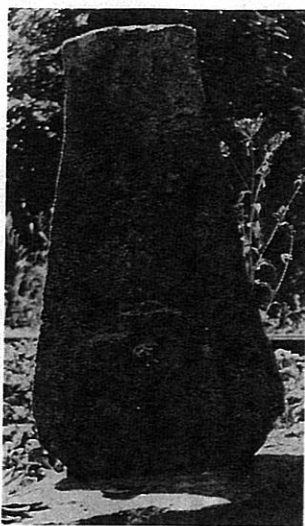
旧往還道から少し山手に入ったところに順教寺がある。かつては塔の岡にあった寺である。号は木船山といい、天正二年（一五七四）僧教春が開基したと伝えられている。この場所は、市川氏の居宅跡で正面の石垣の向かって左側の下部は当時のままである。この寺の金銅円板懸仏は広島市指定重要有形文化財に指定されている。また山門横の梵鐘は天明五年（一七八五）安芸郡船越村の植木直政が作ったものである。

順教寺前の道辺りからは明確にできない。田の畔道を右に曲がって行くようである。左に旧庄屋の「蔵本屋敷跡」があり、その前を通ったのではないだろうか。

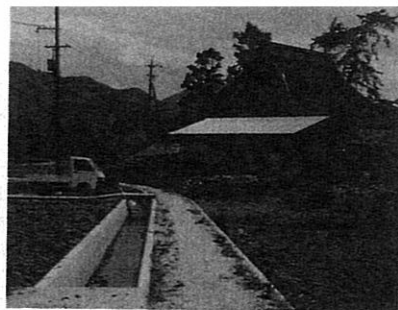
芸備線のガード下（現在の車道が通るガードではなく、手前の水路用のガード）をくぐると田が広がっている。圃場整備が進められ、これ以後の道は無くなっているが、かつては水路沿いの道がガードまで続いていたとのことである。圃場整備が行われる中で、車道のガードから東側の田の中から



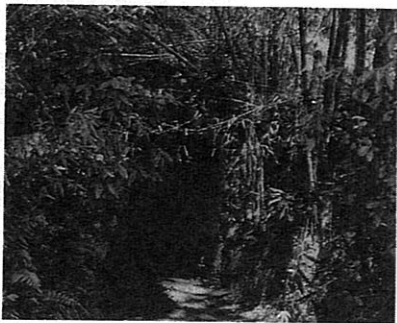
家の石垣に沿う道



大寺の道標



コンクリート製側溝がつけられた道



水道の出口

らコンクリート製の側溝に挟まれた小道が続く。かなり曲がりくねっているが、これが旧往還道である。付近の人はこの道を「オウカンドウ」と呼んでいた。

河原に入ると現在も使われる道が続く。河原公民館、市原川を過ぎると芸備線甲斐平隧道下に来る。ここから道は上にあがったようで、現在の車道とはほぼ同じ所を通っていたようである。上にあがる所の左側に岩をくり抜いた水道の出口がある。この水道の取水口は三篠川の麦藁井手と大井手の中間にあり、三篠川の水を市川の田に引くためのものである。導水路と岩をくり抜いた水路は大変な労力を必要としたものであろう。

甲斐平から大寺への間、旧往還道は県道の整備や鉄道の敷設で削られ、その跡を見ることができないが、三篠川にそった現在の県道に近い道であったと考えられる。大寺集落の手前で、現在の県道と鉄道の間に石造の道標がある。高さ七〇センチメートル、幅は最大四〇センチメートルの道標で中央に地藏尊を彫刻し、右に「上ハ大谷道」、左に「下タハ広島往還」とある。大谷道は大寺から大谷へ越え、古屋への道であり、旧往還道との分岐点に置かれた道標である。本来は、現在地より少し大谷口の集落寄りであったとのことであるが、鉄道敷設の際に現在地へ移された。

大谷口の集落と鉄道の間を進むと道がなくなる。旧往還道は、芸備線を斜めに渡り、さらに県道を斜めに渡ると県道下に旧往還道の名残を見付けることができる。家の石垣に沿う幅五〇〜七〇センチメートルの道がそれで、ここから旧往還道は大寺地区を複雑に曲がりながらすすんでいる。石垣の右側は三篠川で、氾濫もあつたので石垣が堤防の役割を果たしていた。

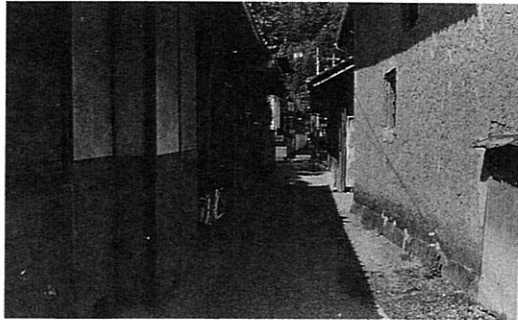
石垣に沿って進み、狭い家の間を抜けると左折し県道へ出る。さらに一〇メートルほど行くと今度は直角に右折する。コンクリート道は無くなるが、田の中に幅約七〇センチメートルの畔道が県道三七号線に向か



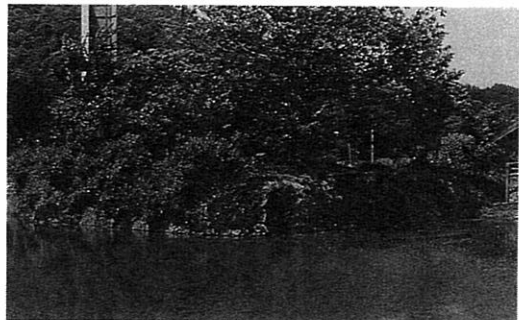
井原の胡神社



大寺から県道37号線へ続く道(県道から)



井原市内の辻道



平塚

つてある。これが旧往還道で、県道を越えると前面に田が広がるが、さらにその延長上に水路に沿って幅約九〇センチメートルほどのコンクリート製の畔道として続いている。

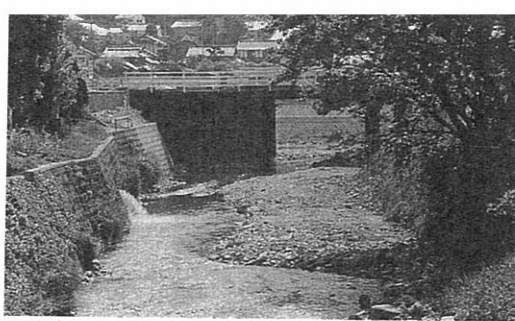
田の中の道を進むと、左手に「平塚」と呼ばれる屋敷跡がこんもりと木を茂らせている。水田の中に位置し、一段高い位置に石垣を組んでいる。さらに圃場整備された水田の中を約一キロメートル直進する道は幅二・三メートルある。幅は広くなっているが、このコンクリート道が旧往還道である。この道が県道三七号線を横切る前に「相撲取りの墓」がある。旧往還道に面して立てられた石碑で、表に「品川六兵衛塚 文政十三年寅八月二十六日 大五良建」とある。

この石碑から県道を横切る間の旧往還道の上には現在家が建てられ、通ることは出来ない。県道を越えると井原下市に入る。旧市場町での旧往還道は町並みに沿って直角に曲がる所が多い。往来の人々を市の前に通すため作爲的につけられたというのが、下市の場合も同様で現在も町並みに従って直角に曲がり県道に出る。

井原市に入ると左手に胡神社がある。「国郡志御用ニ付下調書出帳」の「上市、下市に胡堂二社」とある内の一つで、「祭日三月廿日、十月廿日、晚市より儀式仕候」とある。この胡社は井原市の里程の中心となっており、同書には「里程当村市胡堂より長田村大内迄壹里式拾丁(略)、市川村順教寺迄式拾八丁(略) 吉田町江三里(略) 三次町江八里(略) 広島江八里半」とある。

市中を町並みに沿って進むと、左手に浄土真宗浄満寺がある。旧往還道はこの寺の手前を左折する。現蜂須賀外科と醤油店の間の辻で、左右を蔵などに挟まれた古い面影を残した小路となっている。

小路を抜けた所のブロック塀の間に高さ一六〇センチメートルの石の墓が旧往還道に面して建っている。表面には「頭取都川丈兵衛」とあり、右に「安政三年」、左に「九月十日」と彫っている。江戸時代、藩へ納め



栄堂川



戸石の踏切



都川丈兵衛の墓



相撲取り・品川六兵衛塚

る年貢米は川船で積み出していった。船着場に米倉があり、その管理を任
されていた渡邊氏に、船積み方として力士が雇われ住み込んでいた。都
川丈兵衛はその一人である。

墓の前を直進すると栄堂川に出る。現在は下流に橋が出来ており、か
つての往還道の位置には橋はないが、九尺×一間の土橋が架かっていた
といわれる。米倉と船着場は栄堂川と三篠川の合流点あたりにあったが、
現在は川岸の空き地となっている。栄堂川を渡ると右折し県道三七号線
に出る。ここから旧往還道上に県道が作られており、旧往還道もしばら
くは県道と同じコースをたどる。約七〇メートルほど行くと県道は左
に緩やかにカーブしていくが、旧往還道は三篠川の堤防横を直進してい
く。途中、旧往還道は使用されなくなっており、屋敷地になっている。
竹藪を抜け土手の上を行くと家にあたる。家は通れないが、その延長上
は田の間の道につながっている。田を抜け幅約三メートルの小路に出、
直角に左折し、さらに県道三七号線を越え山の方へ向かって進み、また
直角に右折し山沿いに県道に平行していく。この地は道の形から「横大
道（よこだいどう）」と呼ばれている。

右折した道をさらに進むと戸石の踏み切りに出る。このあたりの旧往
還道は生活道として残っている。踏み切りでは鉄道を直角に横切る道に
変更されているが、本来は鉄道を斜めに渡る道であった。戸石の踏み切
りを越えると山際を通る幅約一・八メートルの山道となっている。左手
には旧往還道に沿った石垣が残っている。木々の間の小高い山道を下り
ると古くからの集落に出る。屋敷は石垣の上に建ち、一段高いところ
にあり、右手に広がる田地とその石垣の間を直進して行く。このあたりの
道は現在も使用されているが、さらに直進すると老人ホーム三篠園につ
きあたる。旧往還道は三篠園の建設のため途中削られ分からなくなっ
ている。建設前は竹藪の中を行く道であったとのことである。

三篠園を抜けるとところに小川があり、旧往還道は小川に沿って進む。



田の畦をぬけ村境へ



石垣と田の間を行く(正面が三篠園)



村境



新宮神社

この横にある神社が新宮神社である。「国郡志御用ニ付下調書出帳」には「一、新宮大明神 祭日九月八日、夜より同九時右御神事、御儀式者八幡宮同様に御座候、右天方村、講上五組より年番にて御供仕候」とある。境内の大イチョウは広島市指定天然記念物に指定されている。新宮社から旧往還道は家が並ぶ中を行く。道幅は改修され約四メートルと広くなっているが屋敷の位置は変わっていない。家は改築されているが、屋敷の位置と旧往還道の関係がよくわかる。改修されて広くなった道を直進すると芸備線につきあたると山際と線路の間を行く。現在には使用されていないためこの道は荒れている。

ここを抜けると田の中の畔道となり、さらに竹藪の中に入る。竹藪の中は幅約一メートルの道が続き向原との境に至る。村境は藪の中の小川である。以後、向原を経て吉田に続く。

(菅 信博)